

Kimono Refashioned

: Japan's Impact on International Fashion



© Asian Art Museum, San Francisco

開催概要

ニューアーク美術館 (ニュージャージー)

会期：2018年10月13日～2019年1月6日

主催：ニューアーク美術館

企画：公益財団法人京都服飾文化研究財団
サンフランシスコ・アジア美術館

サンフランシスコ・アジア美術館

会期：2019年2月8日～5月5日

主催：サンフランシスコ・アジア美術館

企画：公益財団法人京都服飾文化研究財団

シンシナティ美術館

会期：2019年6月28日～9月15日

主催：シンシナティ美術館

企画：公益財団法人京都服飾文化研究財団
サンフランシスコ・アジア美術館

* 「Kimono: Refashioning Contemporary Style」に題名変更

監修：深井晃子 (京都服飾文化研究財団 名誉キュレーター)

キュレーター：新居理絵 (京都服飾文化研究財団 キュレーター)

各館担当キュレーター：

キャサリン・アン・ポール (ニューアーク美術館 キュレーター)

森嶋由紀 (サンフランシスコ・アジア美術館 アソシエイト・キュレーター) カリン・G・オーウェン (サンフランシスコ・アジア美術館 アソシエイト・キュレーター)

シンシア・アムネウス (シンシナティ美術館 チーフ・キュレーター)

展覧会主旨

きものは19世紀後期以降、西欧のファッションに見逃せない影響を与えてきました。きものの文様や形への興味に始まり、現代服が誕生する1920年代になると平面的な構造や直線的な裁断が西欧服の現代化へのヒントとなりました。

本展はそれらを踏まえて、きものが現代のファッションを刺激し、新たな創造を促している点に焦点を当てました。19世紀半ば以降の、きものに影響を受けた作品を先導役として、現代デザイナーたちが染織技法、形、着こなし方など様々な角度からきものにヒントを得ている作品を取り上げました。KCIの衣装コレクションを中心に、米国の美術館が所蔵するジャポニスム期のきものが登場する絵画作品の他、きものや浮世絵などを展示。世界に愛されるきものへのあらたな関心を引き起こすと同時に、現代ファッションの方向性を検証しました。

出展内容

KCI 収蔵品の衣装類を核としながら、絵画、きもの、浮世絵、染色型紙などを米国の美術館から出展。「Kimono in Paintings」「Japonism in Fashion」「Kimono in Contemporary Fashion」「Japan Pop」の4セクションで構成しました。

ニューアーク美術館:

・ドレス、きものなど	50点
・絵画	2点
・浮世絵、染色型紙など	9点
・その他	7点
合計	68点

サンフランシスコ・アジア美術館:

・ドレス、きものなど	38点
・絵画	2点
・浮世絵、染色型紙など	4点
合計	44点

シンシナティ美術館

・ドレス、きものなど	61点
・絵画	5点
・浮世絵、意匠図案など	8点
・その他	3点
合計	77点

主なブランド、アーティスト(50音順)

ドレス類 19世紀後期-1920年代

ウォルト、ヴィオネ、エイミー・リンカー、シャネル、ターナー、ドゥイエ、ドゥーセ、ベロー社、ボワレ、ミス・リリー、モリヌー、ルシール、ルフ、E.L. メイヤー

ドレス類 現代

アレクサンダー・マックイーン (サラ・バートン)、132.5 イッセイ・ミヤケ、イッセイ・ミヤケ (宮前義之)、イッセイ・ミヤケ・メン (高橋悠介)、イリス・ヴァン・ヘルペン、グッチ (トム・フォード)、クリスチャン・ディオール (ジョン・ガリアーノ)、クリスチャン・ルブタン、コム・デ・ギャルソン (川久保玲)、J. C. ド・カステルバジャック、ジュンヤ・ワタナベ・コム・デ・ギャルソン、ジョン・ガリアーノ、ネ・ネット (高島一精)、ハナエ・モリ (森英恵)、マウリツィオ・ガラランテ、ミタス+アンリアレイジ (森永邦彦)、ラコステ・ライブ (大矢寛朗)、ラフ・シモンズ、ルディ・ガンライヒ、ロエベ (ジョナサン・ウィリアム・アンダーソン)、ロシヤス (アレッサンドロ・デラクア)、山脇敏子、ヨウジ・ヤマモト

絵画

ウィリアム・メリット・チェイス、ジェームズ・ティソ、ロバート・ブラム、リチャード・ミラー

浮世絵など

勝川春潮、葛飾北斎、菊川英山、鈴木春信、鳥居清長